

### 第九表 草津白根山噴火

湯釜、水釜、空釜ノ三火口アリ往時ノ火口壁ノ東南部ニ位シ略ホ東北ヨリ西南ニ向フ一  
 直線上ニ排列サレ、中央ノモノハ湯釜ニシテ最モ大ニ、東北ノモノヲ水釜ト云ヒ、西南  
 ノモノヲ空釜トイフ、共ニ冷水ヲ湛フ。空釜ハ明治十五年以前ニ於テハ全ク乾燥シ居タ  
 リ、湯釜ハ現今ニ於ケル活動ノ中心ニシテ熱湯ヲ湛フ。(東洋學藝雜誌第四二二號)  
 (碧海理學士ニヨル)

年月日

明治十五年八月六日

同上 (西曆)

一八八二年 八月 六日

記事

六日夜噴出ス。山ノ南方三里許ナル干俣村ホシマタニ於テ「ドドオン」ト爆音ヲ聞  
 キ戸障子外レタルモアリ、翌日降灰アリタリ、其後二三回噴出アリシガ  
 噴出物ハ主トシテ泥土ニシテ湯釜附近ニテハ極メテ夥シク、弓池ノ如キ  
 モ一時ハ殆ド埋没セラレントセシ程ナリ、當時泥土及降灰ハ主トシテ東  
 方ニ飛散セラレ且ツ其量夥シカリシ爲メ、溢レテ毒水澤ニ入り、終ニ吾  
 妻川ヨリ利根川及ビ前橋附近ニ至ルマデハ魚族ノ死スルモノ極メテ多カ  
 リシトイフ。現今湯釜ノ東方雄鷹山斜面ニ至ル附近一面ノ地ニ認メラル  
 、立チ枯レノ樹木ハ當時ノ降灰ノ爲メ枯死セシモノナリ。活動ノ中心ハ  
 略ホ湯釜西方部ニアリシモノ、如シ。(東洋學藝雜誌第四二二號)  
 (碧海理學士復命書ニヨル)

草津温泉ノ古老湯本平内氏ノ談ニ依レバ明治十五年ノ爆裂前凡七十年頃  
 マデハ白根山頂ヨリ噴煙シツ、アリシガ、約七十年間ハ全ク噴煙ヲ絶チ  
 居タリ、明治十五年ノ爆裂以前ニ於ケル山頂ノ状態ハ水釜・湯釜・空釜ノ  
 三四地アリ、水釜ハ清水ヲ湛エ水面最大ニシテ、中ニ魚蟲ノ游泳スルア

リ、湯釜ハ其ノ凹地ノ東北ノ半部ニ冷水ヲ湛エ、西南半ハ乾涸シ居タリ而シテ其ノ水ハ酸味ヲ有シ、稍青色ヲ呈セリ、即チ湯釜トハ呼ベドモ其ノ溫度ハ人體ニ溫ク感ズル程ニ非ズ、タゞ其ノ味ガ酸味ヲ帶ベルノミナリシナリ、空釜ハ全ク水ヲ有セズ、全部草及ビ小樹ヲ生ジ居タリ、又水釜・湯釜モ共ニ水際ニ至ルマデ草ト小樹ノ叢生地タリ。

斯ノ如キ有様ナリシ所へ、明治十五年八月六日突然爆裂セリ、コノ夏ハ長雨降り續キテ日々山ヲ見ズ、當日モ午後二時頃遠雷ノ如キ響キヲ聞キシガ、白根山ハ雲隠レシテ見エズ且永年靜穩ナリシ後ナレバ、人々ハ何ノ故タルヲ知ラザリキ、後ニ漸ク西北ノ信濃澁溫泉ヨリ澁峠ヲ越ヘ來リシ旅人ノ報ニ由テ、始メテ白根山ノ破裂行爲ナリシヲ知レリトイフ。

八日雨晴レテ始メテ山頂ニ噴煙ヲ見タリ、噴出物ハ多ク微細ナル火山灰ニシテ、風向東南ナリシヲ以テ主トシテ西北信州方面ニ降下シ、上州側ニ於テハ中腹以上ニ降下シ堆積セシノミ、其ノ灰ノ色ハ濃キ灰色ニシテ、性質粘土ノ如ク、其ノ上ヲ歩行スル時ハ滑ルコト甚シカリシトイフ、(今日ニテモ猶厚サ數寸ノ層ヲナシテ所々ニ殘存シ、灰白色ニシテ粘土ノ如シ)、破裂後數日ニシテ登山シ見タルニ、コノ爆裂ハ湯釜及ビ其ノ近傍ニ多クノ小口ヲ開キ、或ルモノハ泥土ヲ吹き出シ、或ルモノハ水蒸汽ノミヲ噴出シ、或ルモノハ水蒸汽ト共ニ火山灰・岩片ヲ飛散シ居タリ、而シテ其ノ最モ著シキ噴出口ニアリ、一ハ湯釜ノ中ニテ空釜ニ近キ方ニ偏シテアリ、猛烈ニ泥水ヲ噴出セリ、一ハ空釜ノ中ニ湯釜ニ近キ方ニアリ、小ニシテ湯氣ヲ噴出シ、ソノ勢猛烈ニシテ高く

年月日

同上 (西曆)

記事

明治三十年七月八日

一八九七<sup>年</sup>七月八<sup>日</sup>

柱狀ヲナシテ噴騰シ、コレニ交リテ屢々岩片ヲモ噴キ上ゲタリ。

コノ時ノ噴出物ニシテ三四地以外ニ噴出或ハ降下シタルモノハ、多ク東ノ毒水澤ニ押シ出シタレドモ、其ノ量多カラザリシヲ以テ、何等ノ損害ヲモ、及ボスコトナカリキ。

コノ破裂後山頂附近ノ樹木ニテ、噴出地ニ接近セルモノハ全ク噴キ拂ハレ、遠キモノハ降灰ノ爲メニ、立チナガラ枯レテ、今猶ソノマ、ニ殘レリ、而シテ此時生ゼシ多クノ噴出口ハ噴汽口トシテ繼續シ、時々灰ヲ噴出スルコトアリシモ次第ニ衰へ、何時トハ無ク山麓ヨリ噴煙ヲ認メ得ザルニ至レリ。

湯釜ハコノ時ヨリ熱湯トナリ、且ツ以前ハ東北半ニ湛エタルモノガ、西南部ニ移リテ、東北ハ乾涸セリ、水釜ノ水モ酸味ヲ帶ブルニ至リ、空釜モ亦酸水ヲ湛エ、弓池ノ水モコノ時マデ清水ナリシモノガ、酸味ヲ有スルニ至レリ。

コノ破裂ノ前兆トシテハ、三十日程前ヨリ山頂附近ニテハ地中ニ鳴動ヲ感ジ、硫黃坑夫ハ恐レテ下山セシ後ニ破裂起リテ幸ニ危難ヲ免レタリ、コノ鳴動ハ草津ニテハ感ズルコトナカリシトイフ。  
(震災豫防調査會報告第七十八號大橋良一氏草津白根火山地質調査報告ニヨル)

白根硫黃山ハ七日午後一時頃ヨリ翌八日午前二時頃マデ屢々雷鳴ノ如キ響キヲ發シタル末、午前四時頃轟然硫黃池ヨリ噴火シテ其勢凄マジク、

探礦用ノ軌條並ニ橋梁ヲ粉碎シ其近傍ニハ十四五貫ノ石塊ヲ噴出シタル程ニテ草津地方マデモ多少ノ降灰アリシガ幸ニ人畜ニハ死傷ナカリキ。

(明治三十年七月十四日時事新報)

野々山須坂警察署長報告摘要 硫黃山事務所員ノ談ニヨルニ本年五月二十五日製鍊ニ着手セシニ其後時々鳴動アリテ殆ド大砲發射ノ如ク感シタルモ其方向ヲ詳ニセザリシト云フ。七月七日ハ終日微雨、爲ニ硫黃鑛採掘ノ工夫等ハ既ニ午後五時頃ニ製鍊所ニ引上ゲ各自ノ部屋ニ歸リタルニ午後六時頃ニ至ルヤ轟然一聲ノ劇シキ鳴動アリ又々十五分ヲ經テ稍小ナル鳴動アリタリ。午後十二時頃ヨリ該事務所ノ東北四丁ヲ隔テタル噴口即チ去ル明治十五年八月六日噴出口ノ方位ニ於テ鳴動スルノミナラズ地盤ノ動搖ヲ感シタルガ、夜明ニ至リテ眺望スルニ從來ノ噴口ヨリ東北ニ當リ凡百間ヲ隔テ岩山ノ間ニ於テ大ニ噴出シ其四丁四面ニ灰砂ヲ噴出シ現ニ噴出中ニシテ其近傍へ近ク能ハズ、同午前五時再ビ鳴動アルヤ最初噴出シタル場所ヨリ西南ニ當リ凡ソ百間ヲ隔テ、大池ト稱スル從來ノ噴口ニ沿ヒタル箇所ニ於テ俄然大噴出ヲナシ鑛物運搬用ニ供スル軌道ヲ長サ三十餘間及ビ同道架橋ヲ噴キ揚ゲ其形跡ヲ失セシメタリ、其噴出當時最モ烈キトキハ熱湯ニ泥濘ヲ交ゼ高サ凡ソ六七十間ニ噴キ揚ゲ其時間凡ソ三時間ニ及ビタリ而シテ從來ノ大池ト接續セリ、其噴口ノ周圍凡ソ百五十間内外ニシテ既ニ大池ノ噴口ト合シタリ、本口ノ噴出スルヤ最初ノ噴口ハ全ク止マリタリ、其ノ周圍六十間深サハ凡十間ノモノト推測セ

年月日

同上(西曆)

記事

ラル、而シテ工夫等ハ毎早朝一回位鑛物運搬ヲ例トセルニ一工夫前夜如何ニナシタルカ知ラザルガ爲メ例ニヨリ車ヲ輓キ軌道ヲ往キタル際ニ大池ノ舊噴口ノ傍ニ至ルヤ目前ニ於テ第二ノ噴出ヲナシ噴揚タル泥濘ノ熱湯ニ交リ飛散シタルヲ以テ非常ニ驚キ狼狽シ鑛物運搬用箱ヲ冠リ辛フジテ引キ返シタル爲メ一人ノ負傷ダモアラザリキ。大池ト稱スル所ハ凡ソ直徑二百間ノ大鍋ヲ以テ泥濘ヲ沸騰スルガ如キ有様ニシテ實ニ凄ジク、最初噴出シタル當時ハ直徑三四尺以上ノ岩石噴出シ殊ニ西北ノ風アリシヲ以テ同所ヨリ東南ニ當リ三里ヲ隔テタル草津溫泉ノ附近マデ灰ヲ降ラシ恰モ大霜ヲ結ビタルガ如キ狀況ナリシト。明治十五年八月六日噴火ノ際ハ部内高井村及ビ山田村地籍ニシテ境界ヨリ凡ソ一里四方ノ樹木ニ害ヲ受ケ何レモ大樹立枯レ場所ニヨリテハ一面ニ枯木ノミ今ニ存立シテ新ニ樹木ノ發生ヲモ認メズ、今回ハ更ニ縣下ニ及ブ損害ナシ」本年一月十七日強震以來ハ須阪町ニテハ毎月二三回鳴動セシコトアルモ、噴出後ハ大ニ減少セリ。(明治三十年七月廿一日信濃毎日新聞)

噴出ノ前一ヶ月許リ湯釜ノ噴氣復活トナリ且ツ硫黃ノ噴出モ盛トナリ終ニハ火焰ノ出現ヲ見ルニ至レリ、又地震モ頗ル頻繁ナリケレバ、當時硫黃精鍊所ニ在リタル人夫ハ二百名許リナリシガ、漸次下山シテ噴出ノ一週間許リ前ニ及ビテハ只八人ヲ餘スノミナリキ。噴出ハ夜ノ十一時ニ起リ約三十分位繼續シタリ、「ドンドン」ト大音響ヲ發シ、多量ノ泥土ノ外

明治三十年七月三十一日  
乃至八月十六日

一八九七<sup>年</sup>  
七<sup>月</sup>三十一<sup>日</sup>

大石ヲ降ラシメタリ、工夫等ハ荷小屋ノ中ニ避難シ屋根ニハ「カマス」ヲ載セテ之ヲ防ギシ爲メ幸ニ怪我セシモノハ無カリシガ屋根ハ降石ノ爲メ所々打抜カレ、柱ノ破壊サレタルモノサヘアリタリ、當時降灰ハ主トシテ西方ニ飛ビ散シタル爲メ、山田峠以西松川沿岸約二十町許リノ細長キ區域内ニ於テハ其ノ爲メ樹木ノ枯死セルモノ多ク、殊ニ山田峠附近ニ於テ甚シク現今ニ於テモ熊笹ノ外ハ滿山皆立チ枯レノ樹木ヲ以テ掩ハル。此噴火ニ際シテモ活動ノ中心ハ湯釜西部ニシテ當時硫黄鑛石採收ノ爲メ其附近ニ布設セラレタル軌條ノ二三ハ高サ略五十米ノ西方高地ニ噴キ上ゲラレ、今モ其ノ儘ニ存在ス。(碧海理學士ノ復命書ニヨル、氏ハ明治二十七年月日ノ新聞紙其ノ他ニモ噴火ノ記事ナケレバ恐クハ明) 不詳ナル噴火トセラレタルモ明治二十七年ニハ當時治三十年七月八日三十一日等ノ分ニ關スルナラン)七月三十一日午前五時頃噴火ス。大池ノ南方隧閣ノ所直徑凡ソ五間破裂シテ噴坑ヲ生ジ、其ヨリ東方約二十間ヲ距ル所ニ龜裂ヲ生ジテ熱泥ヲ噴出シ重量約四十貫ノ岩石ヲ西北方へ五百間モ吹キ飛バシ、硫黄原料運搬用ノ軌道ヲ埋メ、又々軌道ノ一端三十七間(尺?)ノモノ一本ヲ北方ノ山頂ニ吹キ飛バシタルナド軌道ノ損害略五百間ナリト云フ。泥土ノ飛散シタルハ五里ノ距離ニ達シタルモ山林及作物ニハ被害ナシ。又硫黄原料ノ採取時間ヨリハ少コシク早ク採取工夫ハ大池ヲ距ルコト七十間程ノ白根神社近邊マデ登リシ時、雷鳴ノ如キ響ヲ聞キタレバ、直チニ逃降リシトキ蹟キ倒レテ負傷シタルモノ一名アリキ。(明治三十年八月四日上毛新聞)七月三十一日午前五時數回ノ強震アリ、鳴動劇烈ニシテ俄然從來ノ噴火

| 年月日 | 同上 (西曆) | 記事  |
|-----|---------|---|
|     |         | <p>口ト大池トノ中間鐵道堀割際採鑛場及ビ隧道口ノ前面左右ノ五個所ヨリ巖石土灰ヲ噴出シ數百間四方ニ亂飛ス殊ニ西北方ノ山上ハ徑三四尺ノ大岩石及ビ鑛區内ニ布設シタル軌道ヲ降下セリ。鼠色又ハ黑色ノ燒灰ハ堆積數尺ニ及ビ噴火口ノ水ハ消盡セリ。<small>(明治三十年八月廿一日報知新聞)</small></p> <p>八月二日午前二時鳴動劇烈、岩石ヲ噴出スルコト數十回、天明ニ至リテ止ム。同三日午後二時三十分又噴出シ、隧道口ノ邊ヨリ岩石ヲ亂飛スル劇烈ニシテ該鑛山事務所及ビ製鍊場邊ニ及ビ一人ノ負傷者ヲ生ゼリ、爾來鳴動絶ヘズ。<small>(明治三十年八月廿一日報知新聞)</small></p> <p>須阪警察署長報告摘要 山田地方ノ狀況ヲ調査スルニ本月九日、十三日十五日、十七日ハ各一二回ノ鳴動アリ、昨十八日ハ午後六時及十一時ニ鳴動アリ、其後須阪町ニテハ午後十二時三十分鳴動一回アリ。本朝當署ヘ來リタル白根硫黃山事務所員ノ談ニヨルニ本月二日噴出後時々ノ鳴動及小噴出絶ヘザリシガ十三日、十四日、十六日ノ三回ノ噴出ハ最モ烈シク大池ハ相變ラズ噴出シ、且其東南ニ當リ一大噴出ヲナシ其近傍ハ熱泥ノ爲メ歩行スルニ難ク、又事務所ニ在リテハ二日以後地盤ノ鳴動ヲ聞クコト甚シク該事務所附近ニ於テハ所々ニ一尺以下ノ龜裂ヲ生ジ其間ヨリ音響ヲ發セリト、事務員等ハ草津、萬座或ハ山田温泉ニ滞在シ、時々噴出ノ模様及ビ建物ノ破壞其他ノ模様ヲ視察スル爲メ登山スルニ過ギズシテ前回ノ見込トハ大ニ相違シ尙益噴出ノ模様アリ、事務所近傍ヘハ八九</p> |

明治三十三年十月一日  
明治三十五年七月十五日

一九〇〇一〇三一  
一九〇二七一五

寸ヨリ尺角大ノ噴塊降り、草津附近へハ時々噴泥ヲ降ラセルモ本縣管内ニ及ビタルコトハ一回モナシ。(明治三十年八月廿二日信濃毎日新聞)  
午前三時、小鳴動、噴出。(震災豫防調査會報告第四十九號)

此活動ハ湯釜ニ起リシモノニ非ズシテ、白根山ノ中心ト元白根山ノ中心トヲ連結セル線ニアタリ、寧ロ白根火山ニ近接セル弓池舊火口地方小丘上ニ起レリ、弓池附近ハ數個ノ著ルシキ火口ノ群集スル地ニシテ、弓池其ノ物モ亦二個ノ連結セル火口ニ潑水セルモノニ外ナラズ、此附近ニ於テ是レヨリ以前火山力ノ活動セシ事ハ記録ニモ口碑ニモ無シ。噴火ノ初メハ七月十五日午後四時頃ニシテ多量ニ水蒸氣ヲ出シ砂石ヲ飛バシテ弓池北方小丘ヲ破壊シタリ、其後數ヶ月間活動ヲ繼續シ漸次鎮靜ニ歸シタリ。當時弓池ノ北岸ニハ硫黃採收ノ人夫等ノ爲メ粗末ナル浴場ノ設ケラレタルモノアリシガ、此噴火ニ際シテ其ノ建物全部ハ東南約三百米ノ距離ニアル高地ニ噴キ上ゲラレタリ、弓池ト此ノ高地トノ垂直距離ハ約百米内外ナリ。(碧海理學士ノ復命書ニヨル)  
本年ニ於テハ湯釜ハ極靜穩ニシテ、湯釜ヨリ六百間許南々西ニ於ケル弓池ノ北岸ニアル丘ニ於テ爆裂セリ、湯釜又ハ水釜ノ壁上ヨリ望メバ此丘ニヨリ遮ギラレ弓池ハ能ク見ヘズシテ弓池ノ東南稍々高キ所ニ於ケル小池ハ先ヅ目ニ止マルベシ弓池ハ此小池ト丘トノ間ニアリ。弓池ハ瓢形ノ低所ニシテ爆裂前ハ清水湛ヘ北岸ハ樹木ヲ以テ蔽ハレタル小丘ヨリナリ其弓池ニ面スル側ニ事務所ノ建物アリタリ。此ノ爆裂ニヨリ小丘ハ飛散



年月日

同上 (西曆)

記事

明治三十五年八月廿日

一九〇二年 八月二〇日

シ引續キ蒸汽、岩片ヲモ飛バシ翌晚ニ至ルモ猶ホ止マザリキ、十九日ニハ僅ニ噴煙ヲ見ルノミトナレリ。(地質學雜誌第九卷 川崎理學士報文)

同 三十五年九月四日

一九〇二年 九月四日

八月二十日第二回ノ噴出起リシモ著ルシカラズ。(川崎理學士報文ニヨル) 九月四日烈シキ爆裂起ル。五日夜夕池附近ヨリ灰及水蒸氣ヲ噴出シ萬座溫泉場附近ニテ積灰一寸餘ニ及ビ翌六日朝ニ至リ噴出歇ミタリ。(同上)

同 三十五年九月十七日

一九〇二年 九月十七日

午後一時第四回ノ噴出アリ、草津ニテハ遠雷ノ如キ鳴動ヲ聞ケリ、凡二十分ニシテ黑煙消ヘ鳴動歇ム、石ヲ投出シ灰ヲ飛散セルコト夥シク、黑煙高ク騰リテ草津溫泉場ヨリ望見シ得ベク、降灰ハ風下ニアリテ約半里許ニ達シ噴孔ヨリ五六町ノ處マデハ降灰ノ厚サ三寸許、此後三日間ハ間歇的ニ噴火シ、十九日午前十一時ニモ鳴動アリテ噴煙セリ。九月二十四日實見ノ際モ鳴動抛石起リ其勢頗ル盛ナリキ。明治三十年八月湯釜爆裂ノ十數日前ヨリ湯釜ノ湯ハ漸々減ジ遂ニ一部全ク涸レシコトアリトハ當時白根硫黃鑛山ニアリシモノノ云フ所ナリ、而シテ今年ノ爆裂ニ於テモ湯釜ノ湯ハ稍減ゼリト云ヘリ。(同上)

明治三十八年十月

一九〇五年 十月一日

先般噴火シタル上野越後ノ國境ナル白根山ハ又々噴火シテ硫黃ヲ吾妻川ニ流出シ夫ヨリ利根川ニ流レ出ダレバ前橋附近ハ本日午前中此ノ警報ニ接シ夫々準備スル所アリタレバ養魚ハ格別ノ被害ナカルベシ。(明治三十八年十月二十五日 中外商業新報)